



Title	意匠学会60年の回顧
Author(s)	宮島, 久雄
Citation	デザイン理論. 2020, 75, p. 2-3
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75330
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

意匠学会 60 年の回顧

意匠学会 元会長

宮 島 久 雄

意匠学会は 2009 年に 50 周年記念を迎えたが、それから早 10 年が過ぎた。今回あらためて 60 周年の回顧文、50 周年記念以後 10 年の回顧文を依頼された。まず、この 10 年ということで目立つのはこの間に開催された 10 回の大会のうち、4 回の大会が関西以外の地で開かれたことである。それらをあげると、第 52 回大会（関東学院大学）、第 55 回大会（福井工業大）、第 56 回大会（お茶の水女子大）、第 59 回大会（秋田市にぎわい交流館）の 4 大会である。あらためて学会の会員の拡がりの大きさに感心し、かつ開催地の関係会員の努力に最大の敬意をはらいたいと思う。これらの地での開催には開催地の会員の大きな努力が必要であったからである。これらの大会により、関西以外の会員が増え、各地の大学に意匠学会の存在と活動を知って貰えたならば、広報的な意味では非常に望ましいことであり、今後の発展につながるだろう。後輩のためにも、その成果は、なんらかの客観的なかたちで是非、記録しておいてほしいと思う。

他の 5 回の大会はいずれも関西で開かれた。第 53 回大会は国立民族学博物館、第 54 回大会は京都工芸繊維大学、第 57 回大会は武庫川女子大学、第 58 回大会は京都精華大学、第 60 回大会は同志社大学で開かれた。国立民族学博物館ではその多彩な資料群を、京都工芸繊維大学では美術工芸資料館所蔵品とともに旧大阪府工業奨励館製作試作品など、武庫川女子大学では所蔵着物コレクション、京都精華大学では新設の友愛館、同志社大学では今出川地区の建築群を見学でき、日頃、例会などで訪れても、簡単には見ることのできない場所の見学は非常に有益であった。

大会とともに例会も着実に催されてきた。例会は毎年度 5、11、2 月に開かれ、2009 年 11 月の第 200 回例会までは回数で表示されたが、それ以後は 2010 年 2 月例会、5 月例会というふうに年月の表示に替わった。一方、分科会のようになくなったものもある。最も早く、数多く開催された被服分科会（1962）もいまは活動を停止している。これに、ID 分科会（1967）、理論分科会（1970）、CAD 分科会（1984）、メディア分科会（1990）、デザイン史分科会（2007）が次いだが、いずれもいまは活動していない。分科会とはいっても、その開催には一つの例会と同じくらいの労力が必要であるし、各分科会の独自性も認識する必要があるので、例会に吸収されている現在の姿はそれはそれで学会の実情

に即しているとも考えることもできるだろう。あるいは、個別化、細分化を嫌う学会の気分があるのかもしれない。会員の発表意欲は大会、例会に十分吸収されているようである。

60 周年を迎えた現在、学会のかかえる問題は、藤田前会長も指摘されているように、国際化の問題だろう。国際化、それは言い換えると英語による表記、表現の問題である。『デザイン理論』では第 29 号 1990 から論文の題目と要旨などが英語で記載され、現在に至っている。『意匠学会 50 周年記念誌』によれば、発表全体を英語で表現したものは、口頭発表で 1 回だけあったようだが、その後はない。会員の構成を見れば、すべてが日本語で行われるのは自然であろう。会員による英語での発表は、第 55 回大会 [H25, 2013] から行われるようになり、その後、第 59 回大会まで 5 件あった（第 55, 56, 58 各 1 回、第 59 回 2 件）。英語で発表、討論できるような環境はこれから整ってほしいと期待される場所である。

今後、学会の国際化は必要であり、それに備えるためには、例えば、『デザイン理論』に要旨だけでなく、論文自体を英文で掲載し、大会、例会に英語による発表の場を設けることも可能だろう。あるいは、現在『デザイン理論』掲載の英語の要旨をより一層活用して、それを朗読、拝聴し、そこで互いに討論できる場を設けるのもよいだろう。論文要旨の英文表記は現在も義務づけられ、実行されているので、こうした活用は十分にあり得るだろう。しかし、新企画は十分な準備を待って行うべきであり、一気に実現できるものではない。この際、広く会員に学会の国際化問題を提起して、具体的な解決策を提案してもらうということもよいかも知れない。われわれの多くは生来日本語で考え、日本語で表現するという環境の中にいる。国際化の問題はこのような環境を前提として、その中で論文や発表の英語表記、英語表現の機会を増やして行くことだろう。

2002 年度に始まった学会賞、論文賞、作品賞の授与も継続して行われている。学会賞は「学会の枠を越えて授与される」こともあるという規定が一度だけ適用されたことがあったが、継続していないのは「枠を越える」ことが如何に難しいかを示しているようだ。しかし、賞そのものが継続していることは関係者の努力によるものであり、喜ばしい限りである。論文賞、作品賞についてはほぼ継続して授与されており、会員の励みになっていることだろう。関係者の努力を多としたい。

60 年を顧みるならば、これまでの積極的な成果を肯定し、より一層推進するべきであろう。学会会員による 60 年の成果はそれだけの重みと大きさをもっており、機会に応じて回顧しながら、展望して行きたいものだと思う。